【社会科】教科提案

テーマ：　ひとり学習の充実からまなざしの共鳴へ

1．研究テーマ設定の理由

（1）めざす子どもの姿

社会科の究極的な目標は，社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかかわり，社会生活の中でどう生きていくかといった，自分の生き方を考え，社会の中で望ましい行動ができるようにすることである。

これは子ども一人ひとりに，自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。社会科学習で，「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするためには，社会的事象に主体的にかかわる必要がある。

そこで，社会科でめざす子どもの姿として，次のように考えた。

A：事実を正確にとらえ，こだわりをもちながら学習をすすめていける子

B：社会的事象を公正に判断し，未来につなげられる子

Aの「事実を正確にとらえ」とは，事実に基づいて見たり考えたりすることである。これは社会科学習の原点であり，社会的事象から具体的な事実を正確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は様々である。それは、既習内容の理解や生活経験が異なるからである。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは、社会的事象に対して，自分なりに解釈（意味づけ）して考えることである。新たな社会的事象と出会ったときに，友達の考えと自分の考えを比較したり，共感したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で，子ども一人ひとりが友達とかかわりながら，自分の思いやこだわりをもちながら学習をすすめることで，社会的事象を総合的に考えることができるのである。

Bの，「社会的事象を公正に判断する」とは，社会的事象の一面的な事実を調べることにとどまらず多角的・多面的にとらえることで，事象や課題を公正に判断したりすることである。社会的事象の多くは，立場を変えて見ると違った見方ができるものである。それを一面的に見ていたのでは，その真実に迫ることができない。多角的・多面的にとらえることで，より広い視野から考えることができ，子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また，自分の見方や考えを表現し友達と比較することにより，公正なものの見方ができるようにしていきたいと考えている。

また，「未来につなげられる子」とは，自分が生活している社会に愛着をもつことであり，それをもとにした自分なりの未来の社会像を描くことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで，自分の思いや願いをより深め，自分なりの生き方や生活の改善につながるのである。そして，“自分にとっては”“自分ならば”と自分と社会とのかかわりを考えて，未来につなげていく子に育って欲しいと願っている。

①ひとり学習の充実からまなざしの共鳴へ

社会科学習で大切にしたいことは，子ども一人ひとりが自ら問題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ，自分なりに思考し判断しながら解決する力や自分の言葉で表現する力，学習で得たことを自らの生活の向上に生かす力を身につけることである。社会科の学習を意義あるものにするには，全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えを練り合う場であり，ひとり学習を発展させる場でもある。全体学習はひとり学習のために，ひとり学習は全体学習のために相互に関連しながら位置づけられるのである。

学習課題（問題）を設定するのは子ども達であるが，ひとり学習を充実させるために教師がどのような学習対象を選ぶのかということが重要になる。

ア. 学習対象の選び方

まず，子ども達がひとり学習をすすめていく学習対象が，適切かどうかについて考えなければならない。一人ひとりの子ども達が学習対象と出合ったとき，ひとりで学んでいける学習対象であるかをよく吟味しなければならない。子ども達が，多角的・多面的にいろいろな角度から疑問をもち，追究できるものが学習対象としてふさわしいと考えている。

イ. 学習対象との出合わせ方

初めて学習対象に出合うとき，子ども達がその学習対象についてどのような思いをもっているのかということを大切にしたい。「その学習対象について，ぼくは○○だと思う。」「わたしは，○○についてこんな疑問をもっているよ。」というように，様々な思いをもたせたい。自分なりの思いもなしに学習対象と出合うことがないように指導しなければならない。学習対象に対して，一人ひとりの思いをしっかりもつことから，ひとり学習がスタートするのである。

ウ. 学習対象との関わり方（まなざしの共鳴）

学習対象と出合ったとき，子ども達は様々な疑問をもち，追究をはじめ自分で課題をみつけていく。追究活動が深まるほど，子ども達はもっと探究したくなりひとり学習がより深められ，それが学習に対する自信にもつながるのである。指導者はこのとき誰がどんな事を調べ，どのように資料作りをしているのかを事前に把握しておくことも大切である。子ども達の考えや学習過程を知ることは，子どもと指導者とのまなざしの共有につながるのである。また，自分の疑問を解決できない子どもに対して，調べ方や方法をアドバイスすることも効果的である。

学級での全体学習で話し合いが始まると，いろいろな考えがでてくる。友達の考えを聞き，自分の思いを出し合う中で，「なるほど、そんな見方や考え方があるんだな」と友達の考えに共感することや「ぼくと○○さんとは考えがちがうようだから，◇◇を用意して，もう一度，ぼくの意見を言い直してみよう。」というように，自分の考えや行為を更に高めるきっかけになり，新たなひとり学習の追究が始まるのである。このように，子ども達同士が“相互の刺激”し合い，響き合いながら学習をすすめることが重要なのである。お互いのまなざしを共鳴させながら学び合うには，認め合い，励まし合う学級集団でなければならない。

（２）「意味と内容」がひろがる社会科の学び

①社会科における「意味と内容」

社会科では，「意味と内容」を，

“社会的事象に対する自分なりの考えをもち，他とのかかわり合いの中で社会的な見方や考え方をもつこと”と，とらえている。

子どもは何かの事象にぶつかったとき，一人ひとりの事象に対する見方がちがってくる。その見方のちがいが一番わかりやすいのが社会科の学習であると考えている。子ども達が社会の形成者として成長していくために必要なことは，社会科で学習する内容や事柄だけではなく，学校や家庭で学習・体験することすべてが，何らかの形で役立っていく。社会科で学習する内容は，現代社会の中にある事柄を取り上げて学習するため，社会科はより具体的に直接的に社会にかかわる教科であるといえる。また社会の仕組みは，単に知識として獲得するようなものではない。「ひと・もの・こと」の対象とかかわらせる中で必然性が生まれ，それを追究していくことで身についていくものと考える。

②「意味と内容」をひろげる

「意味と内容」をひろげるとは，子ども達が対象に対して意味づけしていくことである。子ども達が対象に向かって追究していくとき，単に学習内容の範囲を広くするということではなく，自分の追究をより確かなものにするために，自分の力で対象に向かい考えていこうとすることである。学習を教師側から引っ張っていくのではなく，子どもに寄り添って考えていくことが大切である。例えば，「クラスの子ども達は，今どんなことに興味をもち，何を見つめているのか」とか「この子はこの問題をどうとらえ，どのように向き合うだろうか」というような視点が必要になってくる。子ども達はその追究の過程を通じて，新たな知識・理解を獲得し，深め，よりよく問題を解決する資質や能力を身につけていくのである。この場合，教師は，その追究意欲を刺激し方向づけ，その追究活動を支援する存在でなければならない。

また，単に覚えただけの知識と，必然性をもって追究する中で獲得した知識とでは，同じ事柄でも、子ども自身が使えたり使えなかったりという問題が生じてくる。暗記中心の知識は、子どもの中では事柄そのものが単独でしか存在しない。しかし，追究する中で獲得していった知識は，単なる知識そのものではない。その知識を獲得するための道筋や学び方が大切なのである。

2．社会科学習でのまなざしの共鳴

社会科学習のまなざしの共鳴について，「ほんまもん和歌山！伝統の業（わざ）」（４年　伝統工業《紀州漆器》）の実践から具体的に考えていくことにする。この単元で考える「意味と内容」とは，“社会生活の中で人間の生き方にかかわる考えや人間の生き様を知ることで，社会の仕組みを正しく見つめることができ，自分ならこのようにすると考えを深める。”と、とらえた。

本単元では「紀州漆器」グループの発表をきっかけに伝統工業の学習がスタートした。学級全体としての課題に対して，「ひと・もの・こと（和歌山の特色を生かした）にせまろう！」のもとに，一人ひとりの問題が生まれる。「紀州漆器」を見学し，蒔絵体験をした後も同様である。

見学した谷岡さんは，「紀州漆器」の数少ない「塗り師」である。プラスチック製品のように大量生産を考えることなく，近代化の波にもまれながらも，伝統的な手法で「紀州漆器」を守っていこうとしている人である。谷岡さんの「塗り師」としての姿を見て，高度な技術だけに目を向けるのではなく，谷岡さんの工夫や苦労を考えることで，「紀州漆器」にかける思いや願いを

つかませたいと考え，学習をすすめていった。谷岡さんの「紀州漆器」の工房を見学し，プラスチック製のお盆に蒔絵体験をした後，『谷岡さんのすごさ！』について話し合った。その後，「紀州漆器」を広く考えられる課題をみんなで考えた。

課 題　「紀州漆器」の将来を考えよう。(谷岡さんの思いや願いに触れながら)
◎紀州漆器は，今後も続く？　続かない？

本時では，伝統工業の「紀州漆器」の将来を展望する討論形式の話し合いから学習がはじまった。子ども達の考えを事前に把握してみると，予想通り『伝統工業の紀州漆器は，今後は続かない。』という考えが多かった。安価で手ごろなプラスチック製の漆器が主流の現実がある。また、「紀州漆器」の「塗り師」は谷岡さんだけで，後継者が今のところいないという話を見学時に聞いているからである。話し合いで出された考え方は，次の通りである。

『今後も続く』
- 木の漆器が好きな人がいる。
- だれかが，後継者になる。
- 谷岡さんがつくり続ける。
- 歴史がある。それを守る。
- 「紀州漆器」を忘れささない。
- 娘さんが後を引き継ぐ。
- 高くても，きっと買う人がある。
- 貴重なものは残る。

『今後は続かない』
- 谷岡さんの後継者がいない。
- 全部がプラスチック製になるだろう。
- 木や漆がなくなってしまう。
- プラスチック製は安いから。
- 伝統工芸品は高い。売れなくなる。
- 谷岡さんがつくるのをやめる。
- 漆器全体の売り上げがさがっている。
- 木の漆器は，ますます使われなくなる。
- 技術進歩で，プラスチックと木の区別がなくなる。

子ども達は，話し合いの中で自分とは異なる多様な考えと出合った。『今後は続かない』と考えた子どもの中には，ここ数年の「紀州漆器」全体の売り上げが減少傾向にある資料を示した子もいた。学習の最初の頃は、『今後は続かない。』という考えが優勢であった。しかし，「いい品物は，値段が高くても売れる。だから残る。」、「谷岡さんがつくるのをやめても，誰かが後を継ぐ。それはきっと，娘さんだ。」という考えが出された。それに対して，「娘さんが後を継ぐとは限らない。やっぱりなくなると思う。」という意見が出された。その後，「今まで５００年間も続いているんだから，きっとこれからも残る。谷岡さんみたいな人がきっとつくり続ける。見学にいったとき，そんな気がした。」という意見がでた。この子の考え方を契機に，『今後も続く』は優勢になっていった。ある子は，「ぼくは，続かないと思ったけど，誰かが後継者になってつくり続ける。今までの伝統の灯を消すはずがない。」と考えを変えたのである。このように，子ども相互のまなざしを共有し，“刺激”し合うことで，互いの考えを高める結果となったのである。子ども達は，谷岡さんの仕事ぶりに触れ，谷岡さんの生き方や「紀州漆器」に対する思いや願いやこだわりを自分なりに追究していった。その追究を深めながら，現在の「紀州漆器」の実情や今後の展望などを広く考えることで，子ども達の伝統工業に対する「意味と内容」がひろがったのである。